

シンポジウム (令和元〔2019〕年11月9日)

## イギリス文学の狩り - 『自負と偏見』の場合 -

河野 豊

(本学文学部国際言語・文化学科／本学大学院文学研究科日本語・日本文学専攻教授)

狩り -文学・歴史学・民俗学・食物栄養科学の視点から-

イギリス文学の狩り—『自負と偏見』の場合—

別府大学大学院文学研究科  
食物栄養科学研究科・別府大学アジア歴史文化研究所共催  
日時: 2019年11月9日(土) 13:00~16:30  
会場: 別府大学メディア教育・研究センター4Fメディアホール

ジェイン・オースティン  
Jane Austen

1775 - 1817



姉のカサンドラによるスケッチ

1811年 『分別と多感』

1813年 『自負と偏見』

1814年 『マンスフィールド・パーク』

1815年 『エマ』

1818年 『説得』及び『ノーサンガー・アビー』

死後出版(合本)

19世紀の状況	上流階級	貴族 ジェントリ	上流階級
		国教会聖職者・法廷弁護士・内科医・ 上級官吏・陸軍士官・海軍士官	階級
中間階級	中流階級	商工業ブルジョワ階級	流階級
		上層以外の職業(中小工業者、職人、 商店主など)、借地農、農民、事務職	階級
		熟練労働者	労働者階級
		半熟練労働者	
下層階級	下層階級	未熟練労働者	

# 『自負と偏見』 (『高慢と偏見』) *Pride and Prejudice* (1813)

① 世の中の誰もが認める真理のひとつに、このようなものがある。たつぷり財産のある独身の男性なら、結婚相手が必要に違いないというのだ。  
(小山太一訳『自負と偏見』新潮文庫(2014)、第1章、p.9 以下全て同書よりの引用)

② ミスター・ビングリーは父親から十万ポンド近い財産を受け継いでいた。父親はちゃんとした邸宅とを地所を買うつもりでいたのだが、実行に移さないうちに亡(な)くなってしまったのだ。——ミスター・ビングリーも同じ意向を持っていて、時々はこれぞという州を決めかけました。だが、今ではネザーフィールドという狩猟の権利(the liberty of a manor)までついた立派な屋敷が借りられたわけである。(第4章、p.25)

manor = 荘園、領地  
manor house (country house)  
= 荘園領主の大邸宅(本宅)  
park = 広大な敷地、狩園

③ 「僕もミスター・ダーシーくらい金持ちだったら」と、姉たちについてきたルーカス家の男の子が声を上げる。「好きなだけ威張ってられるのになあ。狐狩りの犬(foxhound)をしこたま飼って、ワインを一日に一本飲んでやるんだ」(第5章、p. 32)

④ ミスター・コリンズは奥方の意向で奥方の向かい端の上席を与えられ、思い残すことは何もないような表情をしていた。——彼は全員の肉を切り分け(carve)、食べ、一口ごとに味を褒めた。(第29章、p. 260)

⑤ 狩猟(field sports)の時期は完全に終わっている。(第32章、p. 287)

⑥ しかし、歩みは遅かった。釣りは好きだが、めったに機会のないミスター・ガーディナーが、川面に躍る鱒に気を取られたり、庭師に釣りのことを尋ねたりでなかなか足を進めようとしなかったのである。

⑦ やがて話題が釣りに移ると、ミスター・ダーシーはきわめて親切な態度で、当地にいらっしゃるあいだに何度でもこの川でお楽しみください、よろしければ釣り具をお貸ししましょうと言い、いつもあのあたりがよく釣れるのですよと指さしてみせた。(第43章、p. 399)

⑧ 「ま、ひょっとすると気まぐれなのかもしれんね。」と叔父が答えた。「貴族や金持ちにはよくあることさ。だから、いつでも釣りに来いというのは丸呑みしないでおこう。いざ行ってみると気が変わっていて、勝手に入ってくるなど怒られるかもしれんぞ」(第43章、p.404)

⑨ ネザーフィールドの女中頭が、ミスター・ビングリーを迎える用意を命じられたというのだ。明日かあさってにはもう到着で、鳥撃ち(to shoot)のために数週間滞在するらしい。(第53章、p. 518)

⑩「ねえミスター・ビングリー、そちらの狩場の鳥をみんな撃っておしまいになったら、こちらにいらして、主人の狩場(manor)で好きなだけお撃ちくださいな。主人も喜んでお迎えいたしますわ。いちばんいい巣をいくつか残しておきますね」(第53章、p. 529)

⑪ 火曜日にロングボーンで大きなパーティが催され、主賓のふたりは狩猟に熱中して遅れたりすることもなく(to the credit of their punctuality as sportsmen)早めに到着した。(第54章、p. 533)

⑫「ねえ、あなたたち」客たちがいなくなると、すぐにミセス・ベネットが言った。  
「今日のパーティはどうだった？ わたし何から何まですごくまくいっただと思うの。ディナーの出来も最高だったしね。鹿肉(venison)の火の通り具合もびったり——それに、あんなに厚い腰肉(haunch)は見たことがないってみんな言ってたわ。スープも先週ルーカス家で出たのより五十倍もよかったし、あのミスター・ダーシーまで、ウズラ(partridge)がすごくおいしくて言ってくれたのよ。あの方、お屋敷にフランス人のコックがいるはずでしょ。(略)」(第54章、p. 537)

⑬ ほとんど誘うまでもなく、ミスター・ビングリーは夜食(supper)まで居残ってくれた。ついにミスター・ビングリーが腰を上げたときには、主に彼自身とミセス・ベネットの相談で明日の朝ミスター・ベネットと一緒に鳥撃ち(to shoot)に行く約束ができていた。(第55章、p. 542)

⑭「甥御さんと結婚しても、自分が育ってきた環境をはなれることにはならないと思います。ミスター・ダーシーは紳士、私は紳士の娘。釣り合うじゃありませんか」  
「理屈はそうね。確かにあなたは紳士の娘です。でもあなたのお母さまはどこの何者？ 叔父さまと叔母さまは何をしていらっしゃる？ 私が知らないでも思っていたの」(第56章、p. 560)

⑮「(略)あなたの的確な批判は決して忘れられません。『とうてい紳士とは思えない言動』、あなたはそうおっしゃった。あの言葉がどれだけ僕を責めさいなんだか、あなたはご存じないでしょうし、ほとんど想像もおつきにならないでしょう」(第58章、p. 578)